竹取・落窪物語

田中保隆

古典文学全集〈3〉

竹取・落窪物語

田中保隆

田中保隆
竹取・落窪物語
ポプラ社　昭和47（1972）
254p　23cm　（古典文学全集　3）
〔分類〕918

著者略歴

1911年山口県に生まれ，東京大学国文学科を卒業。現在，聖心女子大学教授，立教大学・実践女子大学・お茶の水女子大学等の講師。「自然主義・反自然主義の評論」「大正期教養派の研究」その他，主として近代文学についての論考がある。

古典文学全集・3
（著者との話し合いにより検印廃止）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
竹取・落窪物語
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
編著者・田中保隆（たなかやすたか）
発行・昭和41年10月30日　初版©
昭和47年11月30日　8版
発行者・久保田忠夫
発行所・株式会社　ポプラ社
東京都新宿区須賀町5　振替東京149271番
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
活版印刷・新興印刷製本株式会社
オフセット印刷・有限会社　トラヤ印刷所
口絵原色印刷・株式会社　双美堂
製本・石井製本工場

はしがき

この本におさめた『竹取物語』と『落窪物語』は、どちらも、『源氏物語』が出るより前の作品です。かぐや姫や、まま子いじめの話として有名ですから、みなさんのなかにも筋を知っている方がおおいでしょう。そのころの物語でいまのこっているのは、全部で五つしかありません。私たちの祖先の貴重な文化的遺産ですが、そのうちでもこの二つの物語は、話もおもしろいし、いろいろ考えさせられるところもあり、私たちがいちどはどうしても読んでおかなければならない作品です。

どちらも千年もまえの作品ですから、現在とはだいぶちがったことばが使われています。この本は、それをわかりやすい現代のことばになおしたものですが、もちろん、もとの作品の精神や文章の調子をなるべくそこなわないように注意してあります。

『竹取物語』のほうは、みなさんも話としてよくご存じでしょうから、原典を読んだのとおなじ効果がえられるように、できるだけ原文に忠実に書いたつもりです。また、『落窪物語』のほうは、もともと筋の展開におもしろみがある作品ですし、相当ながい物語でもありますので、本筋にあまり関係のないところ、たとえば儀式のようすをこまかく書いた部分などは、はぶきました。みなさんが、この本をご縁に、日本の古典に興味を持ち勉強してくださるなら、こんなうれしいことはありません。

《目　次》

竹取物語

一、もと光る竹……六
二、求婚……八
三、難題……一〇
四、《仏の御石の鉢》……一五
五、《蓬莱の玉の枝》……一七
六、《火鼠の皮衣》……二六
七、《竜の首の玉》……三二
八、《つばめの子安貝》……三九
九、帝の求婚……四五
一〇、天の羽衣……五二
一一、帝の嘆き……六五

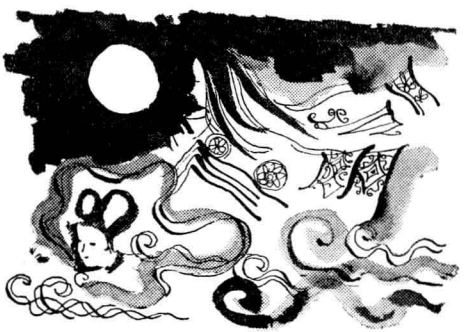
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

落窪物語

巻の一　姫君の嘆き……六
巻の二　少将の復しゅう……一四
巻の三　和解……一九
巻の四　大団円……三七
解説……二四

装てい　新井五郎
さし絵　武部本一郎
カット　難波淳郎

竹取物語



一、もと光る竹

——なよ竹のかぐや姫

もう遠い昔のことになりましたが、そのころ《竹取りの翁》というおじいさんがいました。おじいさんは、野や山にはいって、竹をとり、それでいろんな細工物をつくって、暮らしをたてていました。ほんとうの名前は、讃岐の造麻呂といいました。

ある日のこと、おじいさんが、いつものように山へはいって竹をとっていると、一本、根元の光っている竹がありました。ふしぎに思って、近寄ってみると、竹の筒のなかが光っているのでした。よく見ると、その筒のなかには、三寸（一寸は約三センチ）ばかりの、たいそうかわいらしい少女がすわっていました。おじいさんは、

「わしが朝晩見てまわっている竹のなかにいらっしゃる。わしのとる竹は籠（かご）になるのじゃから、あなたもわしの子になるはずのお方じゃろう。」

といって、手のなかにつつむようにして、だいじに家へつれて帰りました。そして、妻のおばあさんにあずけて育てさせました。その少女のかわいらしいこと、なんともたとえようもないほどでした。たいそう小さかったので、はじめは竹籠のなかにいれて育てました。

さて、この子をつれて帰ってからのち、おじいさんが野山に竹をとりにいくと、よく、節と節のあいだに黄金のつまっている竹を見つけるようになりました。おかげで、おじいさんはだんだん金持ちになっ

ていきました。女の子もずんずん育って、三月ばかりでもう、十三－四のおとめほどの大きさになりました。そこでおじいさんは、それまでおかっぱにしていた髪を結いあげさせ、おとなの着物をきせて、お祝いをしました。それからのちは、部屋の外にもださず、だいじにだいじに育てました。少女の姿かたちの美しいことといったら、この世にくらべるものもないほどでした。家のなかは、すみからすみまで美しさに照らされて、光に満ちていました。おじいさんは、この子を見ると、気分のわるいときでも、すっと苦しさが消え、腹をたてているときでも、気

持ちがなごやかになるといったありさまでした。

おじいさんは、それからもずっと竹をとりつづけ、黄金をたくさんためて、威勢のいい長者になりました。そしてこの子もいよいよおとなになりましたので、三室戸（今の京都府宇治市）の斎部の秋田という神主を呼んで、名前をつけてもらいました。秋田は、竹のなかにいたなよやかな、かがやくようなお姫さまというので、《なよ竹のかぐや姫》という名をつけました。おじいさんは、この名付けの祝いに三日間さかんな宴会をひらきました。だれかれかまわず呼びいれ、歌をうたったり舞を舞ったり、たいそうにぎやかに遊び楽しんだのでした。

二、求婚

——熱心な五人の貴公子

このかぐや姫のうわさを聞くと、世の中の男という男は、身分の高い者もひくい者も、

「なんとかして会ってみたい。自分の妻にしたいものだ。」

と、恋いしたって心をみだし、夢中になってしまうのでした。男たちは夜もおちおち眠らず、まっ暗な闇夜にさえも、姫の住んでいる屋敷の垣根や戸口のあたりに出かけ、穴をあけたり、のぞき見をしたり、ひと目でいいから見たいものだと、うろつきまわりました。けれども、おなじ屋敷に住んでいる人でさえ、めったに姫を見ることはできないのですから、どんなことをしても見られるはずがありません。

ほかの人が行こうともしないところを、わざとうろつき歩いてみても、まるできめはありません。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

せめて姫の家の人にことばだけでもと思って、声をかけても、てんで相手にしてくれないのです。それでも、姫の屋敷のそばをはなれず、夜を明かし日を暮らす、身分の高い貴公子たちがたくさんいました。しかしやがて、それほどふかく思っていなかった人たちは、

「ききめもないのに、むだにうろつき歩くのはつまらないことだ。」

とあきらめて、姿を消してしまいました。

そういうなかでも、なおあきらめずに通ってきたのは、ものの情けのよくわかる、風流な貴公子と、そのころいわれていた五人の方々でした。この方々は姫を思いつづけて、夜も昼も通ってきたのですが、その名は、石作の皇子・車持の皇子・右大臣阿部のみむらじ・大納言大伴の御行・中納言石上のまろたりといいました。世間にありふれた女性でも、すこしでも美しいというわさを耳にすると、たちまち心を動かすような人たちです。この世のものとも思えないほど美しいという、かぐや姫の評判を聞くと、もうすっかり心をうばわれてしまいました。食事もわすれて姫のことを思いつづけ、屋敷のまわりを歩きまわるのですが、さっぱりききめはありません。手紙を書いて持っていかせても、返事もくれません。胸の思いの苦しさをよんだ歌をおくっても、返しの歌ひとつよこしません。なにをしてもむだなことだとは思ってもそれでも、あきらめないで、五人の方たちは、雪が降り、氷がはる冬の寒さにも負けず、かんかんに照りつけたり、雷がおそろしく鳴ったりする真夏の暑さこわさにもへこたれず、一心に通ってくるのでした。

この貴公子たちは、あるときは、竹取りのおじいさんを呼びだして、

「どうか、かぐや姫を私にください。」

頭を地につけておじいさんをおがみ、手をすり合わせて頼むのでしたが、おじいさんは、

「私の実の子ではございませんので、思うとおりにもならないのでございます。」

と、はっきりした返事もせず、ぐずぐずと月日を過ごしています。こんなありさまなので、みんながっかりして、家へ帰るとどうしたらいいかと思案にふけり、神や仏に祈ったり、願をたてたりしました。いっそあきらめてしまおうと思っても、とてもあきらめられることではありません。そこで、貴公子たちは考えました。

「そうはいっても、けっきょくは姫を結婚させないわけにはいかないのだ。」

今は、それが頼みの綱でした。そうして、貴公子たちは、姫を思う心のふかいことを、せめておじいさんの家の人たちに知ってもらおうと、相変わらず家のまわりをうろつきまわるのでした。

三、難題

――がっかりする貴公子たち

竹取りのおじいさんは、五人の貴公子のかぐや姫を思う心がふかいことを見とどけると、姫にいいました。

「わしのだいじな、だいじな姫。そなたは神仏の生まれ変わり、ふつうの人間ではおありなさらぬが、それにしても、これほど大きくなるまでお育て申したわしらの気持ちというものは、ひととおりのも

のではありませんじゃ。じじいの申すことを聞いてくださらんじゃろうか。」

かぐや姫は、

「それはもう、おっしゃることはどんなことでも、お聞きいたします。神仏の生まれ変わりなどとはすこしも考えておりません。ほんとうの親御さまとお思い申しております。」

といいます。

「おお、なんとうれしいことをいってくださる。」

おじいさんは感激してつづけました。

「じじいももう七十の坂を越しましたじゃ。きょう明日とも知れぬ命、あとのことが心配でたまりません。いったい、この世の人は、男は女を妻にもち、女は男を夫にもつものです。そうしてこそ、子どもも生まれ、一族もさかえるというもの。そなたも、いずれは夫をおもちにならんではすまされぬことじゃ。」

「まあ、そんなことがどうしてできましょう。」

「いやいや、いくら神仏の生まれ変わりとは申せ、姫は女の身でおありなされる。じじいが生きているあいだは、こうしてもいられましょうが、いなくなったらどうなさる。あの方々が、長い年月、あれほど熱心におこしになって仰せられることを、よくよく考え、どなたかひとりを夫とおきめになってくだされ。」

「それほどいい器量でもございませんのに、殿方の心の奥底もよく知らず、うっかり結婚などいたしま

して、ほかに心をうつされたりしますと、あとで悔やむこともございましょう。そう思いますと、とても結婚する気がおこらないのでございます。どんなに身分の高いお方でも、ほんとうの心の中を知らないでは、夫としたくはございません。」

「わしの思っているとおりのことをおっしゃる。いったいどういう心ばえの方と結婚しようとお思いか。どのお方も、お心のふかい方ばかりのようじゃが。」

すると、かぐや姫は、

「それほどむずかしいことを申しているのではございません。ほんのちょっとしたことでございます。五人の方のお気持ちはみなおなじ程度ですもの。どの方がいちばんふかく思ってくださっているか、私にはわかりません。ですから、かねがね私が見たいと思っているものを見せてくださった方に、いちばんお心のふかい方として、お仕えしたいと存じます。みなさんにそうおつたえくださいませ。」

と申します。おじいさんは、

「それはよいことじゃ。」

と承知しました。

日が暮れるころになると、いつものように五人の貴公子たちが集まってきました。ひとりが笛を吹くと、ひとりは歌をうたいます。楽譜をうたう人、口笛を吹く人、扇で拍子をとって、てのひらを打ち鳴らす人、みんなそれぞれ得意の芸を披露して、自分の心をつたえようといっしょうけんめいです。すると家のなかから、おじいさんが出てきました。

「もったいなくも、こんなむさくるしいところに、長い年月おいでくださいますこと、まことに恐縮のいたりでございます。」

と、ごあいさつを申します。

「じつは、〈じじいの寿命はきょう明日がわからぬから、こんなに熱心におっしゃってくださる方々のなかから、どなたかおひとりを思いきめて、お仕えなさい〉と、姫に申しました。みなさまの熱心なお気持ちを拝見しては、そう申すのも当然のことでございましょう。すると姫は、〈どなたのお心にも優劣はつけにくうございますが、それでもかねがね私が見たいと思っているものを見せてくだされば、その方のお心のふかさもわかりましょう。どなたにお仕えするかは、それできめとうございます〉と申します。私も、〈それはよいことじゃ。それならみなさまのお恨みもあるまい〉と申したことでございます。」

おじいさんの話を聞いて、五人の貴公子たちも、

「それはよい方法だ。」

と賛成しました。おじいさんが家のなかにはいってそうつたえますと、かぐや姫は、

「お釈迦さまのお使いになった、《仏の御石の鉢》というものがございますが、石作の皇子にはその鉢を取ってきていただきましょう。それから、東の海に蓬莱という山がございます。そこに根が白金、茎が黄金、実が白い玉という木がございます。車持の皇子には、その《蓬莱の玉の枝》をひと枝折って持ってきていただきとうございます。また、中国に、火から生まれたねずみの毛で織った《火鼠の皮衣》

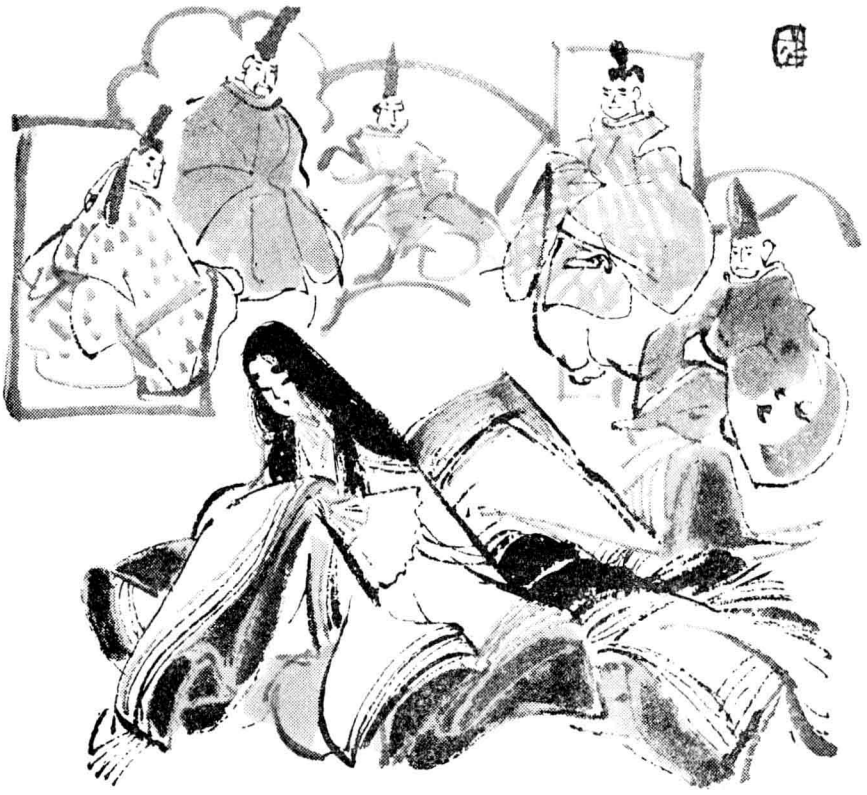
という皮の布がございます。これは阿部の大臣にお願いいたしましょう。大伴の大納言には、竜の首にあるという五色の玉を取ってきていただきます。石上の中納言には、つばめの持っている子安貝をひとつ取ってきていただきたいと存じます。」

と申します。おじいさんは、

「これはどうも、むずかしいことばかりじゃ。どれもこれも、日本の国にはありはしない。こんなむずかしいことをどうおったえしたらよかろう。」

しかし、かぐや姫は、

「ちっともむずかしくなんかご



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com